

イメージは、他のどの国に対するよりも、まさにこの後者にあてはまるのではないだろうか。カエデの国旗(「楓」より「カエデ」と書く方がびっぴりくると思うのは、私だけだろうか)、カナディアン・ロッキ―、赤い制服の騎馬警官、アイヌ・ホッケー……このような断片的なイメージ以外に、カナダを語れる人は、少なくとも私の周りにはほとんどいなかった。そして、彼らをアメリカ人と同一視していたことは否めない。事実、私の接した範囲内では、言葉をはじめ、カナダ人とアメリカ人の間にこれといった違いを見い出せなかったのだから……。

では、カナダ人とはどのような人々なのだろうか。それを考えることなしにカナダという国を理解するのは、不可能だろう。またそれを考えることは、とりもなおさず、一人の外国人としての私が、全く異なった背景を持つ文化を理解することにつながるだろう。

言い古されたことかも知れないが、日本は単一民族国家である。同じ日本語を話し、よく言われるほど同じ物の考え方をすると私には思えないにせよ、文化の基盤や、発想の原点はほとんど同じだろう。そして私たちは、日本人であるという強い意識がある。ところが、カナダにおいては、これが少し異なってくるようだ。人口比は大ざっぱに言って四割が英国系、三割強がフランス系、残りの三割が他のヨーロッパ諸国とアジア系と言われ、いわゆる多民族国家を形成してい

る。それは別に驚くべきことではない。南隣のアメリカもそうだ。しかし、アメリカには、「アメリカ的」と称される考え方や文化が歴然として存在する。例えば北部、南部といった地域性はあるにせよ、アメリカ人という統一した意識が基盤になっていっていると言っただろう。

しかしカナダの場合、確たるイメージが存在しない。というより、未だ出来上がっていないのではないかと、私には思えるのだ。人口比が前述の通りといっても、実際にはカナダの、というよりカナダの内包する文化は、英国系、フランス系の二つに大別されるだろう。面積を考えると(カナダの主要部たるオンタリオ、ケベックの両州を合わせれば、日本の七倍余りの広さがあるというのだから)、別に驚くにあたらないのかも知れないが、やはり、一つの国の中に全く違う文化と言葉が共存しているというのは、信じ難い。

この両者は、例えお互いに、モントリオールとトロントといった大都市の住人で、生活様式が大変似ていても、物の考え方の基盤などに差異があるらしい。兄によると、モントリオールのフランス系の人々と話していると、多分に日本人と話しをしているような感じがするが、トロントの英国系の人々と話をしていると、日本の感覚では、どうしてもズレが出てくる、という。彼は、この夏休み、ロンドン(カナダの)のある英語学校へ通い、そこで沢山のフランス系のカナダ人と知りあったのだそうだが、彼等は、自分たちのことを、誇りをこめて「ケベクォワ」、

つまりケベック人と呼ぶのだそう。そして少なくともそこに集まった彼らのうち、七割が、「カナディアン」、つまりカナダ人であるより、「ケベクォワ」であることの方が大切、と答えたのだという。少なくとも現代の日本で、日本人であることより、〇〇県人であることの方が大切、と答える人が何割いるだろうか。

これと対比させて面白いのが、英国系カナダ人の意識といえる。兄が今いる地域は、川ひとつ隔ててアメリカというカナダ最南部の町アムハーストバーグ。言ってみれば、言葉も慣習も、生活全ての面にわたり、アメリカと何ら変わらない文化圏なのだが、そこに住む人々の強烈な「カナダ人」としての自覚を、折に触れ感じるといふ。何かアメリカ人と異なった存在でありたいという意識が、脈々と流れているのを感じるそうだ。例えば、同じ連邦制の政治体制でも、カナダは立憲君主制、アメリカは共和制だが、この相違を自慢げに話す人がいるという。「我々の女王が……」という言葉はよく聞かれるそうだ。また英国へ旅行する英国系カナダ人の多くは、服装のどこかに、カ

エデのバッジなどをつけるという。純カナダ産の商品には、必ずカエデのマーク入りのカードがつけてある——というように、アメリカの人間や経済と混同されるのをさけたがるようだ。

反面、ケベックの人々は、カエデの代わりに百合の紋章(ケベックの象徴)をつけ、ケベック随一の大都会モントリオールでは、店員が「Que desirez-vous?」ではなく「May I help you?」(どちらも「いらっしやいませ」の意)と話しかけると、少なからず、不快を感じるらしい。この英系、仏系のカナダ人の関係、米国とカナダの関係は、日本人の兄にはとてもわかるべくもないという。このような状況を内包した国が、一つの国家として機能していることに、私も軽い驚きを禁じえない。ましてカナダでは、各州がそれこそひとつの小国家にも相当する強い自治権を持ち、公用語の異なる州までもあるというから大変だ。兄が春から籍をおいた高校(兄は、慶応大学の四年休学なのに、日本人の一人もいない町、しかも、なぜだか高校を希望して行った)では、朝礼の時間に有線放送で必ず国歌



内野さんは、現在、聖心女子学院高等課の三年生。エッセイ・コンテストの一等入賞が決まり、しかも憧れのカナダへ行けるとあって、「信じられません。本当に夢みたいですよ」と感激していた。聖心女子学院へ進学して英文学を専攻し、卒業後はその専攻をいかした仕事をしたいという彼女だが、今のところは、カナダへ行って「観光だけでなく、博物館を見学したり、いろいろな人と話ができるように、早く英会話ができるようにしたい」というのが夢だ。家族は、本人のほか祖母、母、兄の四人。